1．はじめに

当院回復期リハビリテーション病棟（以下、回復期リハ病棟）は、日常生活機能評価の入院時重症度割合が 44%を超えており、安全管理のため身体拘束をせざるを得ない状況が少なくない。運動機能や、高次脳機能障害などの要因のなかで日常生活動作の拡大を進めるには、本来身体拘束はゼロをめざす必要がある。しかし、昨年回復期リハ病棟の身体拘束率が他病棟より高値であったことから多職種での転倒・拘束対策チーム（以下、チーム会）が立ち上がった。今回、チーム会を行ったことで、効果的に身体拘束の解除を行えた事例を経験し、その取り組みについて考察した後方視的研究である。

2．対象と方法

当院回復期リハビリテーション病棟に入院した脳血管疾患患者・整形疾患患者で 2022 年 5 月 1 日～12 月 31 日期間に、なんらかの身体拘束を実施していた患者に対して、多職種チームでカンファレンスを実施した。
今回その中で効果的に身体拘束の解除を行えた 1 事例を取り上げた。

対象患者については、①基本情報、②医学的情報、③リハビリテーション評価を電子カルテの診療録より取得する。

① 基本情報：年齢、性別、入院期間（日数）、転帰
② 医学的情報：疾患名、合併症の有無、既往歴、発症から入棟までの期間
③ リハビリテーション評価：日常誠意活機能（FIM）、高次脳機能障害の有無、認知機能評価（HDS-R）

3．倫理的配慮

1）起こりうる危険や不利益などについて
本研究はカルテ情報をもととする後方視的な研究であり、患者の予後に悪影響を及ぼすような大きな不利益を生じることはないと考える。

2）個人情報の保護の方法
取得した患者情報（基本情報・医学的情報、リハビリテーション評価）は USB メモリーに保存する。USB メモリー内に保有する項目のみでは、氏名や住所などの個人情報は含まれないため、個人を特定できないことが予想される。データが保存された USB メモリーは、浅ノ川総合病院リハビリテーションセンター内の施錠された机に保管し、漏洩、盗難、紛失などが起こらないよう厳重に保管する。
また上記データに関しては本研究の終了とともに USB メモリー内から破棄する。
学会発表の際は、個人情報が特定されないよう、個人の識別を可能にする事実を公にせず、匿名性を守る。
本研究では以上の方法で個人情報の保護を行う。

4．利益相反

本研究は、他企業などの資金提供は受けておらず、結果の判断に利害が発生し、結果の判断にひずみが起こりうる状態にならない。また本研究に参加した対象者に関して謝礼金などが支払われることもない。